

4 大学合同ゼミナール報告

京大岩本ゼミ・神大藤田ゼミ
同大藤原ゼミ・明大高浜ゼミ

2001・12・08

文責 大塚沙羅

共通テーマ

アジア通貨危機後の国際経済安定化に向けて

当日まで～交渉編♪

4大学合同ゼミの交渉は、初夏、神戸大学藤田ゼミとの間で始まりました。岩本ゼミ内で事前に取ったアンケートをもとに、いくつかテーマを提案した結果、“アジア金融危機後のアジア経済の成長はなぜか”に一旦落ち着きました。

例年通り、同志社大学の藤原ゼミ・明治大学の高浜ゼミもあわせ4大学で開催することが決まり、夏休みには、京大・神大・同大の代表者で集まって、各校の進行状況等を報告しあいました。当日までの交渉にはメーリングリストが便利なのは、という声が出て、その流れで私が管理者となり、“taikouzemi”というリストをつくったのもこの時期でした。もっとも、リストが活躍するのはもう少し時間が経ってからのことでした。

正式なテーマが決定したのは、試験が終わり、後期も始まる頃でした。が、各校の詳しい内容については、どのゼミもまだ勉強に必死状態で、大卒しか報告できませんでした。

結局、2週間前に設定した、仮レジュメ交換の時に“おお、こういうことを発表しはるんだ”とやっと納得したという感じでした。

交渉しているときは、なかなか他のゼミの内容がつかめなくて、当日どうなることやらと考えていました。けれどもそこは勉強会、なんとかなるものだ、というのが終わってからの感想です。そ

れより問題だったのは、やはり、ゼミ内でのテーマ設定でした。

当日まで～勉強会編♪

ゼミ内で具体的な勉強が始まったのは、夏合宿からでした。城崎の温泉の香に包まれながら、まず私たちが勉強したのは、「アジア通貨危機とIMF / 荒巻健二」、内容はアジア通貨危機の推移・国際社会の対応と課題などでした。これで、基礎の基礎知識はついた、あとは詳しい京大のテーマを決めるだけ…。けれどもこれが、金融班テーマ探しの長い長い道のりのスタート地点でした。

結果からいえば、私たちは、先生が提案してくださった、BBC Regimeに関する新しい英語の論文をもとに主張をすることになったのですが、ここに辿り着くまでに、大きく回り道をしました。はじめにマレーシアの資本規制を勉強していた以外は、主に為替制度に注目して進めていたものの、カレンシーボードならそれ、通貨バスケットならそれ、と、主張する為替制度を限定しようとしていたため、理論が極端になりやすく自分たちでも疑問があがることばかりでした。

ぎりぎりまで右往左往したテーマ設定でしたが、しかし、それに伴いさまざまな論文・文献を勉強することもできたという、利点もありました。手当たりしだいとも思われましたが、やはり得る

ものは多くあり、当日のレジュメに書いた参考文献はほんの一部とも感じられます。

直前の長時間に及ぶ勉強会をなんとかやりくりして迎えた本番、4つの大学の各視点からの発表はとても興味深いものでした。以下、各大学の主張を追っていきたいと思います。

京都大学岩本ゼミの主張♪

テーマを「アジア経済長期安定のために東アジア諸国がとりうる為替制度に関する提案」とし、Eichengreenらによる“Two Corner Solutions (固定 or 変動)”と“BBC Regime (バスケット・バンド・クローリング) (Williamson[2001])”との対比をもとにして、“BBC Regime”の東アジア諸国における妥当性を検証する。

- ・ 新興市場諸国である東アジア諸国の経済成長には外資流入が不可欠。そのためには、為替レート安定が望ましく、完全な変動相場制はそぐわない。一方で、厳格な固定相場制も、ドル・ペッグ制がアジア通貨危機の構造的要因であったと指摘できるためあてはめられない。

⇒望ましいのは中間的為替制度である“BBC Regime”である。

→Band 過度な為替レートの変動を抑制しつつ、金融政策の自立性もある程度確保できる、典型的な中間的制度。二国間の為替レート変動に対応できる。

→Basket 第三国通貨の影響に対して、安定的に対応。バンド制に加えることで、その持続可能性に寄与する。

→Crawl 広い許容変動幅とインフレ格差の調整により、一般的にいわれるバスケットの否定的意見、インフレ輸入の発生といった問題に対応が可能。

⇒東アジア諸国は、バンド・バスケット・クローリング制を併用するのが望ましい。そして、“BBC Regime”を円滑に機能させるため、効率的かつ安定的な金融システム構築を目指して、今後さらに国際間の協調を図ることも重要である。

神戸大学藤田ゼミの主張♪

テーマは「アジア通貨危機から見るIMF改革」。IMF改革は各国の構造問題・発展にかかわる機能を縮小させ、金融セクターにおける技術支援、経済の発展段階における過渡的な資本取引規制など市場で問題が解決されるべくその機能を環境整備に絞り込むべきである。

1) 金融セクターの強化

国・公共レベルでの指導を行ってきたIMF・世界銀行が、今回のような民間金融機関が大きく関連する通貨危機に対処するには、他の国際金融機関と協力し、技術支援を行うのが適切。金融セクター整備における資金援助に関してIMFは関与すべきでない。また、BISの自己資本比率の達成を目指す各国の銀行に対しIMFは監督を行うことが期待される。

2) 資本取引規制

資本取引規制は各国の裁量に任せることなく、IMFが一律管理すべき。IMFは投資家の行動の急激な変化に対しモニタリングを強化し、債権者・債務者側ともに取引の情報提供を求め、その監査を行う必要がある。さらに、そのデータの収集・分析に必要なシステムを開発するための技術支援を提供すべき。

3) IMF融資制度

IMFの融資能力は民間資金フローの拡大に並行して増大させることは不可能ゆえ、市場調達が可能なのは市場に任せ、IMF融資資金を短期に集中すべき。経常収支面の困難・危機の伝播・市場のパニック等に直面した国への短期資金の供給者として、SBA・CCL・SRF等の融資機能に集中し、中長期的な援助は世界銀行にまかせる。

4) IMFの政治的影響力の排除

アメリカの影響を多大にうけているIMFの監督のためにIEOなどの機関が必要。

同志社大学藤原ゼミの主張

テーマは「通貨金融危機以降のアジア経済の再生と日本の役割」。

1、IMF・世界銀行の問題点

IMFにおいて、事実上アメリカ一国が拒否権を持っていることに加え、世界銀行も完全にアメリカの手中にある。これを是正し、アジアの発言権を引き上げるべき。そして、地域に根ざした柔軟な政策をとる必要がある。このためにも、市民社会がIMF・世銀の監視をすることが重要。

2、アジア地域経済における様々な問題点

アジアの開発銀行であるADBまでが、アメリカのイニシアティブの下にあることや、AMF構想がIMFの反発で消滅したことがあげられる。また、アジア通貨危機は、ASEAN諸国がドルに過剰依存（ドルペッグ制）していたために、起こった。

3、アジア地域経済安定における日本の問題点

90年代において円の国際的地位は低下の一方である。円の利便性を高めるようなインフラの整備が必要とされる。そして、新世紀をアジアの時代にするために、アメリカに頼らない政策を日本のリーダーシップにより進めていくべき。

4、アジア安定のための、日本の役割とは。

円を基軸通貨とする、アジアの円圏を構築すべきである。ASEAN産業協力計画による関税特恵で、アジアのマーケット統一をはかり、欧米資本に対抗することも重要。また、日本は、アメリカ国債の一部をユーロ債にもちかえて、分散投資すべきである。ODAに関しては、アジア・タイドにすると、景気が刺激され、円の強化につながる。さらに、アジア通貨危機の経験から、東アジアでの不良債権を吸収するファンド構想を推進すべき。日本は、アジア代表として、アジア・スタンダードを打ち立てる先導者となるべきである。

明治大学高浜ゼミの主張

アジア通貨危機後の、国際金融安定を実現するための案を、通貨危機の考察とともに主張。ここでは、考察は省略し、国際通貨の安定に向けての提案を紹介する。

◎ 国際通貨の安定に向けて

・ 主要国通貨間の為替の安定

円・ドルレートはアジアに大きな影響を与え、その乱高下はアジア経済を不安定にする。レートの変動を最小のものにすれば、アジア経済は安定するのでは。

・ 現在の国際通貨システムとその問題点

現在の国際通貨システムは“ドル本位制のもとでの変動相場制”といえる。このシステムは、主要国グループによる政策協調の動きによって、変動相場制の欠点が補われ、国際金融秩序の安定を維持してきた。しかし、明確なルールのない政策協調は政治力の影響が大きく、時として為替市場は不安定となる。

国際通貨制度の将来を展望する場合、もう一つ注目すべきは、ユーロや円などが国際通貨として成長しつつあることである。準備通貨・取引通貨の多元化は、それらの通貨の役割が各通貨により分担されることを意味し、貿易・資本取引の混乱が軽減される。しかし、多元化した準備通貨センターで頻繁な資金移動が発生し、国際通貨システムが不安定になるおそれもある。このため、主要国通貨間に極力安定した関係を築くための方策を検討すべきである。

・ 世界経済の展望

通貨面から見れば、ドル、ユーロ、円の三極体制が出来上がっていくとみられる。しかし、円の国際化が進展していない現状や、アメリカの赤字が日本からの民間資本の流入で補填されるメカニズムを考えれば、日米通貨は一極とみなせる。よって、21世紀は、ドル、ユーロの二極体制が予想される。この経済圏に属する新興市場国は、主要国通貨の為替の乱高下を気にすることなく、各国の実情にあった為替制度をとるべきである。

インゼミを終えて♪♪

インゼミって何でやるんだろう、と考えたとき、一番重要と私が感じたことは、“みんなでやり遂げた”という思いをそれぞれがもってくれたこと、でした。大学生活では経験しにくいグループワークの場を与えられていて、私達はそれを勉強という過程を通じて達成していく。だから、出来上がったものは勉強の成果、というより、グループワークの完成、を私は目指していました。

振り返れば、つまりいてばっかりな道程でしたが、それでも、定番の教室に入って、ちょっと変なテンションになりながらもみんなで頑張った勉強会は、得がたい経験であり、楽しいひと時でした。インゼミが終わったあと、皆が“しんどかったけど楽しかった”“いい経験になった”と報告してくれたのを見て、一つの目的はだいたい達成されたのかな、と思います。

当然、山のような反省点もありました。しかし、それは皆がしっかり参加してくれたがゆえに、来年を担う2回生の意識の中にも染み付いていて、また活かしていつてくれると思っています。

インゼミを終えて、いろんな人にいろんな想いがあります。

たくさんの文献や論文をさりげなく勉強してきた、助けてくれた小椋君。去年のインゼミからの知識のストックを披露してくれた西海君。レジュメの最終チェックで熱い議論を交わした(笑)城山君。やる気を出したときに、ちょうど数学担当にされて、うなりながら頑張ってくれた嵯峨さん。勉強も発言もきっちりしてくれて、美しい資料まで作ってくれた杳脱君。そして、教習の合間をぬって来てくれた小畑君、来年も頑張って！あと、長時間の勉強会から帰ってからも、深夜の電話で勉強に付き合ってくれた人たち、本当に感謝してます。

そして、半年以上に及ぶインゼミ委員の道中、ともに苦しんで助けてくれた熊野君、どうもありがとうございます。当日の司会を快く引き受けてくださった酒井さん、ありがとうございました。

岩本先生、ゼミのみなさんには、非常に多くの面でフォローしていただき、また辛抱強く見守っていただきました。皆さん本当にありがとうございました。

本番当日は、藤田ゼミ・藤原ゼミ・高浜ゼミの方々、とくに藤田先生にはお忙しい中、遠いところから来ていただきました。皆様のご協力があったこそ、無事当日を運営することができたと思っております。この場を借りて、お礼申し上げます。

インゼミの目標や意義には、十人十色の解釈ができると思いますが、この場を活かして、この先、素敵なインゼミが生まれていってほしいです。